実力差見せつけられ惨敗

駒澤大学1－6明治大学

試合終了直後、ピッチにうずくまる三島（撮影・大畑淳一）

駒大「らしさ」を取り戻すため…
～ゼロからのリスタート～

「1－6」ここまでの大敗を誰が予想していただろうか。

前期を終えて、首位流通経大との勝ち点差9。逆転優勝のためにはこれからの試合は負けが許されない。それは選手達が一番よく分かっているはずである。しかし、この日は来期東京Ｖに内定が決まっている林、藤田を擁する明大に完全にやられてしまった。

「パスを回されるのはいいんだけど、我慢しきれない」と試合後に秋田監督が語ったように相手のパス中心の攻撃から多くのピンチを迎えてしまい、失点を繰り返した。さらに暑さも手助けし、守備に体力を奪われ、90分間通して駒大サッカーを見せつけることができなかった。

しかし、何も残らなかった完敗だったわけではない。50分には島田のロングスローから山下が気迫のヘディングで1点差まで試合を運ぶことができた。前期の駒大ならばここから逆転に持っていくことができたはずだ。「敗因は頑張るところで頑張れなくて失点してしまったところだと思う」得点を挙げた山下が話したように1点差からの頑張りが足りなかった。残りの試合も1点差や2点差を追いかける状況になることはあるだろう。そこでまたこのような過ちを繰り返すと今度こそ終わりになってしまう。

「沈んでいても仕方がない。やるっきゃないっす」次節に向け秋田監督はこう残して会場を後にした。「気持ち」ときれいごとを言っている場合ではない。ただがむしゃらに駒大のサッカーやるしかない。

一方の主将・鈴木は何も答えることができずに会場を後にした。駒大サッカーを誰よりも理解し、努力し、去年からレギュラーとして戦って来た鈴木にとってショックは大きかったのだろう。それは鈴木だけではないはずだ。駒大サッカー部に関わる誰もが悔しかったはずだ。首位流通経大との勝ち点差は12に広がった。しかし、このままでは終われない。ここでもう一度「駒大サッカー」というものに向き合って、次節の神奈川大戦から再び首位を追走していくしかない。

（東條貴史）

52分、ＰＫを献上し、３点目となるゴールを決められる